

COSMOS集



旭川は上川盆地夏あつく冬はしばれて雪多き町

無二の国 人見江 一* 神奈川県

色あせて無残な姿さらしても散ることのなき紫陽花のはな
原爆忌ふたつ持つ国無二の国 六日、九日、百日紅咲く

あらかじめ暑さやどりのできる店決めて出かけん今年の夏は
ほくたちはマックシェイクの甘さにも猛暑日続く夏にも慣れる
黄揚羽の青虫のため買いに行く農薬無しにつくるパセリを

税 三宅尚道 神奈川県

この暑さ命に關はる 税上がり物価は上がり命に關はる
市県民税固定資産税国保税介護保険税後期高齢者税

家猫と同じ一日暮れてゆけどこにも行かず誰にも会はず
三食の一度はパン食 食パンを喉に詰まらせ父は逝きたり
沖縄に生まれ育ちしわが妻に再び問へり六月二十三日

横浜の夜 荒川ゆみ子 東京

明らかに焦つてをりぬ、夏まひるベランダ歩く一頭の蟻
曇天にひまはり咲きぬカーテンを閉めてる部屋の灯りみたい

泣く理由前頭前野に留めてあり靴を履くときふいにこぼれた
何も無い人は歌などつくらない森田さんいひし横浜の夜
「馬車道の次はみなとみらいです」はるか遠くにあるやうに聞く

原質 瓔子選

「あすなる集」特選

渡航日 高橋みどり*イギリス

一年のうちの三百五十日を異国で過ごす六十過ぎて

原爆忌終戦記念日盂蘭盆会いつしか過ぎて明日は渡航日

独り居を主なき部屋にしてしまふ賃貸住まいの長き一年

二か月に一度は「風を入れに来る」任務を帯びしひとりごあわれ
母一人子一人の子をひとりにし母はひとりで留学に行く

上川盆地 阿部則子 北海道

夜明けまへ隣家の桜桃めがけ来る鴉のこゑに寝不足三日

亡き母の月忌にみえし住職の衣にほのか白檀香る

道内の真夏連続十四日つねに猛暑の新聞記事よ

二十度にみたなき二日その後の三十四度は心もへこむ

水上 比呂美選

カンカン帽 牧 好恵 東京

隣家の大き八つ手が塀越えて天狗がひよいとどく気のする
充電中、わが掃除機の静けさよ蛍のごとく点滅をして
〔無印〕の無人レジにて支払ひす小さな勇氣ひとつ遣ひて
墓参への車窓のむかう見えて来た夏の富士山ぐくつと近く
この夏の猛暑の空はカンカンとカンカン帽の似合ふ住職

まっ赤なマーク 山口 育子*東京

猛暑日は靴底からも熱気きて丸焼きになる豚のきもちだ
猛暑日のまっ赤なマーク今日もでて昼はそうめん食欲なくて
孫子きて夕方からはバーベキュー五キロの肉をのこさず食べる
どうしても糸の通らぬ針の穴孫に頼めば二秒で通る
糸先が針のめどには通らずに針の周りをうろうろとする

立場が変る 五十嵐 トシエ 新潟

待望の雨と思へど間が悪く買物すみてスパー出る時
出穂時わづかな黄色に変はりゆき秋へ移りぬ広き田んぼは
手折りきて花瓶にさせば葛の花ほろほろと散る夏のさかりに
御招ばれば嬉しいけれど数日後お祭りが来る立場が変る
ビール買ふ夫のお供でスパーへポイント2倍の日を選び行く

樽 砧 和泉 邦子 新潟

新潟の新潟甚句「樽たたき」とんと民謡流し始まる
樽たたき男の子も白足袋踏みおろし〔ありやさ〕と囃す新潟甚句
鏡打ち胴を叩けば樽砧たるきめたでけてんてんかつかと響く
並び打つ男の子二人の樽砧響き重なり躍動あふる
樽砧笛と三味線にぎやかに訛り張り上ぐる新潟甚句

虹が立つ 山本 竜作*新潟

風出でて青葉の山がゆれ動き彼方の崖に氈鹿現る
散歩中山麓ゆけばヌツと出る高麗コウライケン天南星テンナンショウおお恐いなあ
虹が立つ巻機山から八海山へ わが心にも虹を立たさむ
白鳥座、竜座並びて煌めけり蠍座も出で夏夜賑わう
藪萱草朱色に開き鬼蜻蜒呼ぶ真夏の奥山登りてゆけば

鈴木 竹志選

ホームの夏 稲吉 裕子*愛知

べた風のダム湖に映るさ緑が夏うぐいすのこえをのみ込む
祭りやぐら組まれホームの夏が来ぬ車椅子の輪一重二重に
ゆわゆわと月昇りくる郊外にマンション群の影くさやかに
訴えたきことがある筈きつとある老女の握りこぶしが震う
黒鍵ひとつ弾き忘れしを指摘する フワット のような男の耳よ

原 爆 忌 小山 芳 子*愛 知

原爆忌今年も蟬の鎮魂歌聞きつつ祈る八月六日
穂孕みの青田ふるわす風吹けばさやけき音に耳立つ夕べ
古希になりし教え子の聞くクラス会「よし先生」の声おもはゆし
若き日の彼らとの日々何もできず共に遊びし思い出ばかり
顔を見ぬあの子この子を尋ねれば吾より短き生を終えしと

万 能 選 手 三 浪 治 子 三 重

よべ来たたる小さき蟋蟀放ちやる大暑の庭の朝のしじまに
輪ができる赤子も老いも親も子もラジオ体操お寺の庭で
わが意をば汲まざるパソコン半角と全角誤り画面固まる
察してはくれないけれどもパソコンは万能選手日々をつき合ふ
古希を経て続々と変はるわが身体弛みと軋みを晒す夏の日

ズボラ決めこむ 塩 山 美恵子 兵 庫

独り居の米寿迎へし義姉さんを傘寿の夫が月一度訪ふ
この夏は猛暑日続き老いわれはズボラ決めこみ出来合を買ふ
連日の猛暑に仏花たへがたく造花をつひに買ひ求めたり
お供物は練香けむるあはひのみ傷まぬうちにお下がりがいたたく
雨降らず猛暑はつづき南瓜枯れ里芋枯れて畑しろく割る

ゲリラ電話 畑 都*鳥 取

陽が落ちてだあれもない緑地には影絵のごとくコウモリ飛び交う

ふと孫の声聞きたくする電話「ゲリラ電話」と言われているらし
盆近く空き家の草を刈る夫に冷却首輪と水筒渡す

草刈りで蜂に刺された夫の背に軟膏を塗りヒエピタを貼る
人形のクマに眼鏡を掛けたれば心の裏まで見られる心地す
水上 芙季選

蜘蛛の網 山下 啓 子*香 川

空かげり夕立前を吹く風にカラスの羽がひとつ落ちくる
エアコンの風をよけてる妊婦さん額の汗に髪貼りつけて
朝日浴び銀に光れる蜘蛛の網物干し竿の二本をつなぐ
蜘蛛の巣に捕らわれているダンゴ虫波打つようにもがく足あり
台風の波風避ける船溜り肩組むように揺れている船

長生きしましよ 池 内 祥 子*愛 媛

蟬が鳴き塩辛蜻蛉飛ぶ庭が本当の夏七月二十日
桑の実でジャムを作れば遠い日の蚕を飼つた部屋の香がする
嫁の母が「長生きしましよ」と言うけれど自信なくした座骨神経痛
蟬の声呼吸と共に吸い込みて老が頑張る体操教室
きのうまで飛んでた燕がもういない八月待たずに旅立つなんて

二十四の男 石 本 洋 子 佐 賀

白ナスの葉にアオガエル止まりをり「三十五度よ、森へお帰り」
勝ちて泣く豊昇竜よ二十四の男の涙見つ清しも

熱帯夜北を枕に寝ねたれど老にも妣にも会はずる一夜
ゆるゆると濁れる堀を船頭の歌に押されてどんこ舟ゆく
船頭は名物の術石橋むすに跳び移り越え舟へ戻り来

ザボン坂 垣野幸一*長崎

いにしえの人が往来ゆきせし日見峠元気なうちには妻と越えたり
ザボン坂と名付けられたる山道に額あじさいの群生つづく
竹林の竹の撓める山道にあまた笹の葉ひかりつつ散る
うす暗き檜の涙を流れゆく水音涼し病葉やさし



うす暗き檜の山を辿るとき落ち葉のうへの木漏れ日明し

十一時二分 吉田静子 長崎

雨つづき雑草のびゆくその早さ植ゑたる野菜はそれほどのびず
梅雨さなか雑草茂りし庭に咲く黄花コスモス特攻兵頭つ
戦中に特攻兵士ら一輪の黄花コスモスもちゆきしとぞ
十一時二分を知らずサイレンに黙禱ささぐエアコンの部屋
原爆忘七十八年すぎしとや昨日のごとく目裏こがす

桑原 正紀選 「その二集」特選

山鳩のこゑ 水鳥葉子 茨城

夕暮れてなほ暑き風ひるがへしつばめ飛び交ふ駅のホームに
灼熱のアスファルトの上に息絶えていちじく色に蚯蚓干からぶ
亡き人のたましひのごと炎昼に影なき茅花ひとつ飛びゆく
生きてゐるだけでいいから、わたしたとわからなくてもいいから、母よ
暁に母の呼ぶ声聞こえたり目覚めて近し山鳩のこゑ

正体不明者 一谷 真樹*神奈川

昼時に財布しか持たず外に出て日傘男子をすり抜けて行く
趣や風情ではどうにもならずよしずの内も熱風地獄
サンクラス・フェイスカパーにキャップした正体不明者とテニスする
広重の「大はしあたけの夕立」に見たてつつ二子橋をわたる
嵐の前どこかの軒の風鈴がへびイメタルのビートをきざむ
ずっと開かない 清水美里*東京

本に指はさんだままで地下鉄の階段下るいつも遅れて

体格の同じ子ら産み妹は笑う「私はプレス工場」

幾重もの水着の跡を証とし海が私のものであった頃

おおつてシンク口ののち一言も発さず君と花火見ている

君がしめた蓋はいつでも固すぎて君がいないとずっと開かない

目配せ 松下誠 一*東京

噛んじやったベロまだ痛い 吊り革を持つ右腕に顔をうずめて

空調の音をはっきり聴きすぎてしたくない雑談をはじめ

プレハブの校舎ですれ違うたびに目配せだけをしてたあの夏

廃線のふみきり閉まることはなくもつかい好きになつてくたさい

しわ寄せはいつどのようにくるだろか耐えられるくらいならいいのだが

真夏の空 宮 梓 一*東京

令和五年駅ビルのなか堂々と「現金支払いのみ」の張り紙

得点に踊るアルプススタンドの奥は真夏の紺碧の空

なぜ今の球を見逃す 酒臭いやジを三年ぶりに楽しむ

白河の関の向こうへもう一度真紅の大優勝旗よ渡れ

仙台で暮らしてたから育英を応援してるわけじゃない 勝て

藤野 早苗選

揃わぬ家族 金子英子*新潟

マスクした夫は眉間に皺を寄せ食事持ちくる手袋をして

熱が出て苦しいけれども少し続いてほしい上げ膳据え膳

隔離期間終わり眺むる通勤の車窓に青き稲穂が揺れる

玄関のドアを開ければ「おかえり」と言う人のいる盆休みかな

帰省した子らはそれぞれ友だちと食事に出かけ揃わぬ家族

星占る人 権田陽子 静岡

独り身ならひとかどの者になれたはず星占る人の我に告げたり

窓外の夏空睨めつつ腹筋に力を込める整体教室

一匹のウスバキトンボ飛びきたる 父さんですよねこの手にとまれ

肩揚げや腰揚げひとつ解くたびうなじも伸びて乙女子となる

まよひなく水色と白のクレヨンで絵日記に描きしわたしの夏空

風来坊 池田あつ子 愛知

をちこちに高砂百合の花咲きぬ風来坊の外來種として

母とわれ互ひの本音を明かさずに夏草伸びる庭を見てをり

昼下がりがポロンとラインの着信音おとうとからの「手術成功」

インク壺のブルーブラックの淋しさへ万年筆のペン先浸す

まつすぐに拘ることはないですぬ飛行機雲のやがてほどけて

覚悟 小田沙也加*愛知

SNS更新いつもより減って盆休みのこと全部は知らない

ブラインド越しに天気を見るときの最初に機能する聴覚

大学院入試ぬる近づいて喉のあたりが黒く渦巻く

やわらかい覚悟で進路を語るとき嘘をつくのと同じ焦燥

勤勉でありたいけれど 裏をかくことを覚えて雨が冷たい

勘 違 い 大 池 アザミ*兵 庫

勘違いされてるままに会話してくずれぬようにそっと立ち去る
雑草が凶暴になる真夏日はぴくりと動くこともおっくう
夕暮れになれば往来息づいて街に血液巡るがごとく
脳内に怒り促す物質が分泌されて取捨つかず
作るってそういうことでしょピーマンも切って炒めて原型消して

狩野 一男選

君 の 名 新 敦 子 鳥 取

いつもならみかさ二センチほどの川氾濫したり七月豪雨
挨拶もせぬ泥水は玄関をとほりぬけたり ようこそ言へず
君の名をお悔やみ欄にみる朝十五にもどるけふ一日は
生徒会に立候補せし君の名の黒の四文字まぶしたすきに
「生徒による生徒のための」訴へる壇上の君わがリンカーン

し っ かり 締 め よ 日 野 幸 吉*広 島

安らかな眠りを覚ますサミットの声明聞こゆる平和公園
サミットの核抑止論斥ける被爆地市長の「平和宣言」
ホームラン連発しおる大谷よしっかり締めよ兜の緒をば
老いてなお鋭き北壁に誘われ来たるは朱夏の伯耆大山

登りつつ抜きつ抜かれつ競り合うは息も切れ切れわが老い仲間
かまんけど 稲 田 ひとみ*香 川

シニアカーに老犬ぼとぼとついていく阿吽の呼吸夏の夕暮れ
小さき蜘蛛がピンチハンガーに糸を張るどんな獲物を待っているのか
かまんけど朝の七時は早すぎない「何がでつきょん」近所のばあさま
幼子が「蟬の抜け殻手に取りたい」そうそういいぞ自力でできた
ドリス・デイの伸びやかな声「ケ・セラ・セラ」考えすぎるな新人たちちよ

稲 妻 日 高 能 子 長 崎

亡き夫の月命日に修行僧のスマホ着メロ経の邪魔する
歳重ね躓くことの多々ありて「おっと」と敷居の段差
テーブルにリモコン並べ四、五本をエアコンONをテレビに向けて
真夜中に無気味に光る稲妻はバリバリドカーンと家屋を揺らす
「ただいま」と出掛けたままのこの部屋はほつとする場所、もの想ふ場所
いきなりハグ 西 山 伊智子 鹿見島

五回目でやつと点滴成功せり 新米なるやこの看護師は
検査後の左手指に感覚なし(もしや神経を?)心が騒ぐ
退院後ホテルの湯船で歌を詠む温泉宿の文豪思ひて
再会にいきなりハグする歌の友退院の日は話の尽きず
振り込まれし四万円に驚きぬ共済からの喜寿の祝ひに